中国から伝わった香りの文化

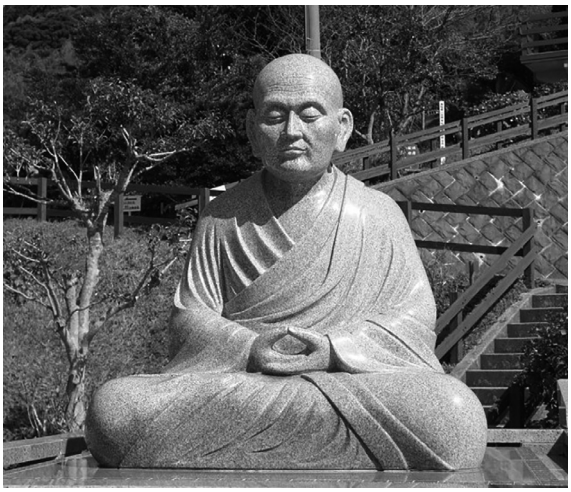
元神奈川大学講師、平安朝香道宗師　長谷川景光（会員）

一、鑑真が伝えた薫物

鑑真は唐の時代に揚州に生まれ、十四歳で出家して洛陽・長安で修行を積み、七一三年に故郷の大雲寺に戻り、そこで江南第一の大師と称されるようになりました。

天宝元年（七四二）、第九次遣唐使船で唐を訪れていた留学僧の栄叡、普照から、朝廷の「伝戒の師」としての招請を受け、渡日を決意しました。その後の十二年間に五度の渡航を試みて失敗、次第に視力を失うこととなりましたが、天平勝宝五年（七五三）、六度目にしてようやく日本の地を踏むことができたのでした。

その後、七十六歳までの十年間のうち五年を東大寺で、残りの五年を唐招提寺で過ごし、天皇をはじめとする多くの人々に授戒をしたことで知られています。



鹿児島の鑑真記念館の鑑真像

しかし、鑑真は仏教だけでなく、書道、彫刻、医薬、そして薫物（たきもの）の調合法もわが国に伝えたとされています。また、来日に際し薫物に用いる香材である沈香木、麝香、甲香、甘松、竜脳、占糖、安息、桟香、零陵、青木、薫陸などを持ち込んだことが『過海大師東征伝』に記されています。

このように、鑑真が苦難を乗り越え、日本にやって来なければ、香文化の発展もなかったのかもしれません。

二、医香同源

私は常々「医香同源」と表現しています。医とは、具体的には中国の医薬である漢方を意味し、香材のほとんどが漢方薬でもあると共に、薫香が治療に用いら

れていたことにも依拠しています。

香が医薬品として用いられ、肉体的にも精神的にも効果があることは、六千年前の古代エジプトのパピルス文書に記されているほどです。また、現代ではアロマテラピーという言葉が日常語となっているように、香りの癒し効果に注目されています。

そこで、唐代を代表する医薬書である『千金方』、および『千金翼方』を紐解き、薫物に関係する香材、そして処方を調べてみることにしました。

まず、『千金方』は六五〇年代に唐の孫思邈（六〇一～六八二）が著し全三十巻にもおよびます。思邈は中国、唐代の名医であり、出自は京兆・華原（陝西省耀県）で薬上真人と尊称され、医神として道教の廟に祀られています。

また、老荘百家の学に通じ、仏典に詳しく神仙家としても名を馳せました。隋の文帝の時、国子博士に召されましたが拝受せず、唐の太宗帝の時にも顕慶中、諫議大夫に召せられましたが、またしても固辞して受けませんでした。思邈は著述に専念するため深山に隠れ、『千金方』『千金翼方』の他、『福録論』『摂生真籙』を著したのでした。

『千金方』の書名については、書中に「以為備急千金要方一部凡三十巻」とあることから、十一世紀、北宋の時代に林億らが治平本を刊行するにあたって「備急千金要方」を正式名称に採用しました。

そこには「人命の重さは千金の貴さがある」という高邁な精神を題簽としており、『千金方』は、魏晋南北朝から隋唐までの臨床医学と鍼灸医学の知識を集大成した医薬書として、その名を知らしめています。

最も大事なことは、この『千金方』が日本にいつ伝来したかということなのです。日本最古の記録は藤原佐世の『日本国見在書目録』（八九一）に「千金方三十一孫思邈撰」と著録されており、遅くとも遣唐使廃止以前に日本に伝わっていたことになります。

北宋時代の改本の構成は、全九篇で、第一巻は序、巻二～四は婦人病、巻五は小児病、巻六は七竅病、巻七は風毒脚気、巻八は諸風、巻九～十は傷寒、巻十一～二十までは五臓五腑の病とその治方、巻二十一は消渇、淋閉、尿血、水腫、巻二十二は丁腫、癰疽、巻二十三は痔漏、巻二十四は解毒、雑治、巻二十五は備急、巻二十六は食治、巻二十七は養生、巻二十八は平脈、巻二十九・三十は針灸となっています。

一方、『千金翼方』も全三十巻で、『千金方』の不備を扶翼する目的で撰述したとされています。成立の年次は不詳ですが、『千金方』の成立以後、思邈没（六八一）以前に完成したことは間違いありません。現伝本の『千金翼方』は『千金方』の場合と違い、林億ら宋臣の手を経たものしか存在しません。

日本にいつ頃伝わったのかは不明ですが、丹波行長の『衛生秘要抄』（一二八八）にその引用があることから、遅くとも鎌倉時代には伝来していたことになります。

現伝本の構成は、巻一～四は本草、巻五～八は婦人、巻九・十は傷寒、巻十一は小児、巻十二は養生、巻十三は辟穀、巻十四は退居、巻十五は補益、巻十六・十七は中風、巻十八～二十は雑病、巻二十一は万病、巻二十二は飛棟、巻二十三・二十四は瘡癰、巻二十五は色脈、巻二十六～二十八は針灸、巻二十九・三十は禁経となっています。

三、唐代の香りの文化

『千金方』『千金翼方』を読み解くと、唐の国における香りの文化の一端が窺えます。具体的には、香りに関する処方を

用途別に、①口臭を消し、口を香らせる方法、②腋臭を治す方法、③身体を香らせる方法、④衣服を香らせる方法、の四項目が記されています。

各項の一例をご紹介します。

①口臭を消し、口を香らせる方法

・五香丸の口臭および体臭を消し、煩を止め、気を散らし香らせる方法

豆蔻　丁香　藿香　零陵香　青木香　白芷　桂心各一両　香附子二両　甘松香　当帰各半両　檳榔二枚

以上の十一種類を粉末にし、ハチミツで練り丸薬にする。大豆くらいの大きさの丸薬を含み、昼三回、夜一回ずつ汁を飲む。五日で口が香り、十日で身体が香ります。十四日すると着ている衣服が香る。二十一日たつと風下にいる人に香りがわかり、二十八日すると手を洗った水が地に落ちて香り、三十五日たつと、他の人の手をとれば、その人の手まで香る。五辛を慎めば気を下げ、臭いを消す。

②腋臭を治す方法

・胡臭を治す方法

辛夷　芎藭　細辛　杜蘅　藁本各二分

右の五種類を細かく砕き、いい酢に一晩漬けて、煎った汁をとり、これをつける。つける時は就寝直前で、治ればそれでいい。

③身体を香らせる方法

・七つの穴の臭いを消し、皆を香らせる方法

沈香五両　藁本三両　白瓜弁半升　丁香五合　甘草　当帰　芎藭　麝香各二両

右の八種類を粉末にしてハチミツで練り丸薬とし、食後に小豆大の丸薬を一日に三回服用すること。長く服用していれば、身体をはじめ、皆香る。

④衣服を香らせる方法

・いぶして衣服を香らせる方法

雞骨煎香　零陵香　丁香　青桂皮　青木香　楓香　鬱金香各三両　薫陸香　甲香　蘇合香　甘松香各二両　沈水香五両　雀頭香　楓香　白檀香　安息香　艾納香各一両　麝香半両

右の十八種類を粉末にし、二升半のハチミツで煮ておく。大きなナツメ四十個を蒸してやわらかくし、粥のようにやわらかくなるまで揉みつぶす。布でこのかすを絞りとり、そこに上記の香料を混ぜて、むぎこがしの程度まで湿らせ、杵で五百回搗き、丸めたものを七日間密封してから使う。香料は湯せんで煮て、火気を消さねばならない。そうでないと焦げ臭くなる。

以上の四つの項目のうち、最後の衣服を香らせる方法に用いられるのが、薫香、すなわち香を焚くという行為なのです。

そして、医薬書には記されていないのですが、この他に重要な唐の国における三つの薫香文化があります。それは、国家行事に用いられる薫香、宗教儀式に用いられる薫香、そして室内で焚かれる薫香なのですが、今回は紙幅の関係から詳述を省かせていただきます。

四、勅撰『薫集類抄』

土御門天皇の曽祖父で、紫式部の血胤（来孫）である平安末期随一の知識人、それが藤原範兼（一一〇七～六五、通称岡崎三位）です。歌人、歌学者として知られていますが、二条天皇に元号考案を命じられただけでなく、長寛年間（一一六三～六五）に『薫集類抄』の撰修を命ぜられました。

同抄は、日本に現存する最古の薫物指南書であり、私が開基した平安朝香道の宝鑑（手本となる書物）としています。薫物に関する書物は多い中で、三条実隆

の家伝書『四辻家薫物書』のような私撰書とは異なり、公的な勅撰書として纏められた同抄は、その格式だけでなく信憑性、歴史性という観点からも極めて貴重な書物と位置づけられます。

そして、唐代の医薬書に書かれた四つの方法を含め、国家行事に用いられる薫香、宗教儀式に用いられる薫香、室内で焚かれる薫香の全ての調合法が記されているのが同抄なのです。

同抄は、「諸方」の帖から始まり、二十七種、百七方もの貴重な調合法が収載されています。そして、二十六人の合香家の名は時系列に並べられており、同じ名の薫物でも合香家によってその香りは驚くほど異なり、この時代の美意識と感性の豊かさを感じます。

同抄には、この他に飲む、塗る、入浴に用いるなどの合香の方（調合）が示されています。また、和合（ブレンド）した薫物は、埋み（うずみ）という熟成を行います。薫物の天敵は黴（かび）ですので低温熟成が基本です。その一方で、加熱し発酵させる指示がある方もあるのです。「控えめであり秘することが雅（みやび）」とされた平安時代の美意識によって書かれた文献を読み解くのは難しくもあり、また楽しくもあります。

藤原冬嗣（模写図）

同抄に収載されている諸方の筆頭に掲げられているのが藤原冬嗣（七七五～八二六）の調合法です。

冬嗣は嵯峨天皇の文化人グループの一員として詩集に作品を遺しているだけでなく、日本初の薫物香道を確立した人物です。嵯峨天皇の側近として信頼が厚く、太政大臣が追号されましたが、同抄には閑院左大臣の名で記されています。

平安朝薫物の同義語として扱われる六種（むくさ）の薫物において、冬嗣は原基となる合香家であり、筆頭に掲げられています。すなわち、梅花（ばいか）、侍従（じじゅう）、黒方（くろぼう）の薫物を最初に作り、平安朝薫物の礎を築いただけでなく、わが国最初の香道家であると位置づけられるのです。

閑院左大臣
梅花
沈八両二分　占唐一分三朱　甲香三両二分　甘松一分　白檀二分三朱　丁子二両二分　麝香二分　薫陸一分（二分の説あり）
侍従
沈四両　丁子二両　甲香一両已上大　甘松一両　熟鬱金一両已上小
黒方
沈四両　丁子二両　白檀一分　甲香一両二分　麝香二分　薫陸一分已上大

冬嗣は、永井路子著の『王朝序曲』（角川書店刊）の主人公として描かれるほど、魅力的で多才な人物ですが、残念ながら香道家としての側面はあまり知られていません。

五、唐から伝わった香の調合法

勅撰『薫集類抄』は、日本に現存する最古の薫物指南書であり、公的な勅撰書という固いイメージがある一方で、平安時代の宮女にとっては、先進的な唐の国から伝わった美容情報も掲載されている、マニュアル本のような側面があると、常々説いています。

まず、同抄に記載されている調合法のほとんどは平安時代に日本で考案されたものなのですが、十一の調合法については明らかに唐の国から伝わったと考えられます。それは、服用すると衣服が百日間も香るという「令人躰香」、湯の中に入れて入浴し体を香らせる「浴湯香」、衣服に焚き染めて香らせる「建医師衣香方」、白粉（おしろい）のように顔や体に塗り付け香らせた「香粉方」、丸薬の形状ながら線香のように火を付けて香らせた「焼香方」、乾燥させた香粉を型枠に入れて形成し火を付けて香らせた「印香法」、宗教の儀式に用いた「供養香」「金剛頂経香」「観世音菩薩留湿香」、そして女性が化粧に用いた「落梅公主潤面膏方」「丹陽公主甲煎方」です。

清代に描かれたと思われる寿陽公主

本稿では、最後の二つの調合法について解説させていただきます。

最初に「落梅公主潤面膏方」についてですが、次のように書かれています。

落梅公主潤面膏方。
新雕経験薬方云。
酥。一斤員者於銀器内漫火煎。成油用。鵞梨汁。少計。海塩花。一両研。馬牙硝。一両。柳汁。少計。
右件薬。與諸般都入酥内。用東南嫩柳枝子七茎長七寸。用生緋線逐寸札。将此枝子。早晨面日東吸咽。気噴在酥内。将一茎枝子。右漫二十七転。其柳枝子頭微黄色。用刀子於線上載却。如是法。七茎柳枝子。直候使尽為度。此膏以成。用浄合子盛貯。以代面油使用。

落梅公主とは寿陽公主の通称で、中国南北朝時代の南朝方である宋の武帝（在位四二〇～四二二）の娘（皇女）です。唐の時代を代表する美女としてその名を知られ、左記のように寿陽公主がある日、含章殿の梅の木の下で眠っていたら、梅花が散りその一片が彼女の額について離れなくなった、これを梅花粧として宮女が皆額に梅の花びらをかたどった化粧をほどこしこれにならったとされています。これは、梅花粧とも寿陽粧ともいわれています。

宋武帝女寿陽公主人、日臥含章殿、檐下梅花落額上、成五出花払之不去、皇后留之、後人効為梅花粧。（『粧楼記』）

寿陽公主の末路は悲壮で、敵方である北魏の爾朱世隆（五〇〇～五三二）に捕らえられて洛陽に送られ、手籠めにされそうになりましたが、従わずに殺されました。

さて、肝心の調合法ですが、潤面膏方とあるように顔を潤すための軟膏、現代で言えばフェイスクリームのことです。調合についての詳述は控えますが、多くの人、費用、時間をかけて開発した、当時の最新技術による化粧品であったと考

えられます。

次に「丹陽公主甲煎方」についてですが、次のように書かれています。

丹陽公主甲煎方。或蔡尼字歟。
沈香六両。丁香四両。風香膏二両。或本一見。青木香二両。麝香一両。浅香四両。棗十枚、去皮。甲香三両。
凡八物剉。蜜合和。若坩裏綿或本作桟員。幕作桟久酒油六升。零陵香四両。甘松二両。綿幕着油裏。煎須緩火。可四沸油。即上去香草香油。着坩裏出口。将小香坩合大坩口。温紙纏口塗封。可七分。須多着大。従旦至午。過午即須緩火。至四更即却火。至明従冷発看。成甲煎。

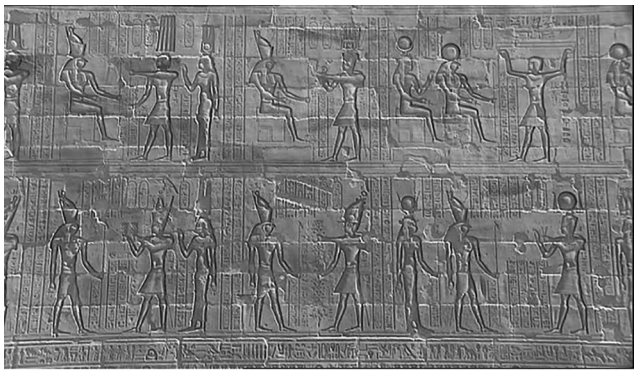
丹陽公主とは、唐の初代皇帝である高祖（五六六～六三五、李淵）の第十五皇女のことです。

その丹陽公主の夫となるのが薛萬徹（せつばんてつ、生年不詳～六五三）で、萬徹は唐の建国後、皇太子である建成に仕え、玄武門の変後に終南山（唐の王維など多くの詩人に詠まれた標高約三千メートルの山）に逃げていましたが、建成が失脚し第二代皇帝となった太宗が重ねて萬徹を招聘し、ついには太宗に仕えることになりました。そうして、太宗の家臣となり萬徹に降嫁させられたのが丹陽公主でした。

次に甲煎方の甲煎ですが、香料と油を混ぜ合わせて、煎じて作る香油のようなものです。記載されている香料のうち、沈香、丁香（丁子）、青木香、麝香、浅香、甲香、零陵香、甘松の八つは薫物によく使われます。そして棗（なつめ）は、前述の「令人躰香」においても大棗が使われているのですが、私が知る限りこの二つの調合法でしか使われていません。問題は風香膏なのですが、これは固体の楓香脂に油を加えたものか、もしくは固体になる前段階の流動体ではないかと考えています。

六、薫物は二千年の歴史

薫物が日本に伝わったのは中国からでしたが、その起源は古代エジプトに溯ります。クレオパトラをも魅了したキフィという薫物があり、十六種類以上の香材料を用い蜜で練り合わせた、まさに日本の薫物のルーツとなるものです。キフィは神への聖なる捧げ物であると同時に、人々の心に安らぎをもたらすフレグランスでした。


キフィの調合法が書かれているエドフ神殿の壁画

古代エジプトで発祥した薫物文化は、アラビア半島に伝わり、現在でもアラブ諸国では乳香、没薬（もつやく）、沈香などを合わせるバフールという名の薫物が人々に愛されています。

さらに、インドに伝わった薫物は仏教と共に中国に伝わり、日本へは鑑真が、そして遣唐使が持ち帰った医薬書『千金方』によってその調合法が伝わりました。

エジプト、インドにおいて儀式、宗教に用いられていた薫物が、中国に渡って医薬に用いられ、最後に日本に渡って文化、芸術として開花することになるのです。

また、薫物は平安時代における宮中だ

けの香道様式のように解説されていることが多いのですが、私には信じられない誤謬です。

薫物は江戸時代においても上級武士の嗜みだったのです。例えば、徳川家康は格式を重んじた人物であり、薫物を愛し『香の覚え』という薫物の調合法を書き記したほどでした。『香の覚え』には、家康が考案した「千年菊方」という貴重な薫物の調合法が記されているのですが、そこには不老長寿を願った家康の想いが込められていました。

さらに、家康の次女である督姫も左記のように「千種（ちぐさ）」という薫物を考案しています。

督姫の方
千種
沈五両。丁子二両。甲香一両。白檀一両。薫陸一両。鬱金一分。甘松二分。麝香二分。

しかし、この記載だけでは、江戸時代の初期における徳川家だけの嗜好であると考えられる方もいらっしゃるかと思います。そこで、江戸時代中期の二人の侍医が記した書をご紹介します。

それは、公家であり中御門天皇の侍医であった錦小路頼庸（にしきのこうじよりつね、一六六七～一七三五）が享保年間に著した薫物書である『香譜記』、そして、元禄五年（一六九二）に彦根藩井伊侯の侍医である苗村常伯（なむらじょうはく、一六七四～一七四八）が著し薫物の作法、調合方が記されている『女重宝記』です。

七、平安朝香道とは

薫物の歴史は世界的に見ると二千年、日本においては千年の歴史があります。平安朝香道は、貴重な日本文化を復興し普及することを目的として、平成十七年三月二十七日に発足し、当道の流儀披露目である「燻り初め（くゆりぞめ）」を十八年二月二十五日に催しました。

薫物香道の原点であり最盛期の平安朝様式を希求していることから、平安朝香道の牌標を掲げていますが、当道は唯一の古典香道の流派であり、芸術性を重んじていることが他の流派と大きく異なるところです。

このように、当道が古典香道と位置づけられるのは、薫物という流儀が最盛期の平安時代から江戸時代中期まで存続したことに依拠します。

これまで、平成十八年四月には六百年前に廃れてしまった幻の香「占唐」の復元に初めて成功し、翌月には『源氏物語』にも書かれている「承和の秘方」二種も初めて復元いたしました。また、十二月には『源氏物語』を代表する香りである「百歩香」の復元をいたしました。

これらの成果に基づき、多くの方に平安朝の薫物の素晴らしさを知っていただくため門戸を開きましたが、優雅で奥深い薫物だけでなく、掛香（かけこう）、訶梨勒（かりろく）、衣香（えこう）などの稽古も行っています。

また当道では、誰もが手軽に本格的な平安朝薫物を作ることを目標とし、古方に学び楽しむだけでなく、その思想に基づいて薫物の創作を行い、毎年秋季に開催する「薫物合わせ」だけでなく、季節ごとに「源氏合わせ」を催しご披露しています。

筆者略歴（はせがわ　かげみつ）
１９５３年生まれ。
元神奈川大学講師。
平安朝香道宗師。
平安楽舎雅楽研究所所長。